

〔研究ノート〕

重兼芳子における芥川賞受賞と カルチャーセンター

—女性の教養をめぐる戦後教育史上の課題—

歌川 光一

Yoshiko Shigekane and the *Culture Center*:
A Case Study of Women's Serious Leisure in the Post-war Educational History

Koichi UTAGAWA

Yoshiko Shigekane (1927-93) was the 12th female winner of the Akutagawa prize in 1979 and was the 10th winner among post-war female winners. This paper looks mainly at journal articles and essays about her achievement and her own recollections of how she became a novelist. Using relevant information from those sources, the author clarifies the factors which allowed this woman to become a celebrated author and her educational environment.

Shigekane was disparagingly called the “housewife author.” She was particularly criticized for her amateurism because she won the prize after preparing in ways that were unusual. She attended a course called “Novel Writing Method” at a *Culture Center* (a Japanese private further education school). *Culture Centers* were one of the most accessible choices women of Shigekane's time had for further education. It was difficult for women to enroll in courses at universities or other officially recognized institutions.

Looking at the criticism Shigekane received for her non-traditional education, the author concludes that people, even in those post-war days, undervalued the seriousness of the pursuits some women undertook in their leisure time.

Key words: Yoshiko Shigekane (重兼芳子), the Akutagawa prize (芥川龍之介賞), culture school (カルチャー・スクール)

1. 芥川賞作家・重兼芳子

本稿の目的は、朝日カルチャーセンターの小説講座受講を通じて第81回芥川賞を受賞した重兼芳子に向けられた、受賞前後の社会的反応を検討することで、戦後教育史の対象として女性の教養を捉える視点を提示することにある。

重兼芳子¹は、1927年に北海道空知郡上砂川町にて出生、父親の転勤で九州に移り、1943年に旧制・福岡県立田川高等女学校を卒業した。先天性の股関節脱臼に関わる悩みを抱えていたことから、1946年にプロテスタントの洗礼を受けている。建

設省に勤めていた夫と結婚した後、1969年、一路短歌会に入会し、歌人として文学活動を開始する。1976年、朝日カルチャーセンターにおいて、駒田信二²の小説講座「小説の作法と鑑賞」に通い始め、1978年「ベビーフード」、「髪」（朝日カルチャーセンター発行『まくた』掲載）が第79回、第80回、と連続して芥川賞候補となる。そして、1979年、『文學界』掲載の「やまあいの煙」で青野聡と共に第81回芥川賞を受賞した³。その後、ホスピス運動家として知られるようになるが、1993年に、癌のため亡くなっている。

後述するように、重兼は、女性の芥川賞作家とし

ては歴代12番目、戦後に限定しても10番目であり、重兼の受賞が話題性をもった要因は、女性受賞者あるいは専業主婦であったことよりもむしろ、1970年代当時、生涯学習ブームを牽引した「カルチャーセンター」の存在であった。

本稿では、主に週刊誌の記事に着目しながら、重兼の芥川賞受賞前後の社会的反応(第2章)、戦後の他の女性芥川賞作家の経歴や受賞に対する社会的反応との比較(第3章)を行う。南後由和によれば、1950年代半ば以降の週刊誌の登場により、「文化人」とそれを受容する大衆の関係は、「文化人」が同一化の対象とされるという点で文化人≧大衆」となり、「文化人」に「わかりやすさ」や「親しみやすさ」が重視されるようになった(南後2010:44)。1970～80年代の芥川賞作家の有名性の構築過程を検討する上で、週刊誌の記事内容の検討は有益だと考えられる。その上で、女性の教養を戦後教育史研究として対象化する視点を示唆する(第4章)こととする。(なお、本稿中の引用箇所については、原文の改行箇所は適宜追いつめ、漢数字はアラビア数字に換えたところがある。[]内は引用者による補記。)

2. 重兼芳子の芥川賞受賞に対する社会的反応⁴

2-1. 「カルチャーセンター出身の主婦作家」

既述のように、重兼は受賞以前に2回候補に挙がり、1978年から注目されていた。受賞を逃した際に重兼は、「選にもれて、これほど晴れ晴れとした顔のひとつというのも珍しいのではなからうか。あの太宰治が恋いこがれた芥川賞の、候補に終わった重兼芳子さんである」で始まる記事において、「そんなんです。わたくし、ごっく普通のオカミさんでしょう。ほかにすることがなくて、道楽にお台所で小説を書いているんですもの。ほかの一生懸命やっていらっしゃる方に、申し訳ないわ」と述べている(「苦節」とまったく無関係!! 芥川賞候補になって『困っちゃった』重兼芳子さんの社長夫人と小説家の間』『週刊朝日』1978.7.28)。

しかし、受賞決定後、重兼は「カルチャーセンター出身の主婦作家」として、本格的にマス・メディアを賑わせることになる。

重兼に注がれたまなざしは、主婦役割と矛盾しない小説家像である。「芥川賞 重兼芳子氏」では、以下のように紹介されている。

重兼芳子氏 といって“文学一途 髪ふり乱して”のタイプではない 御主人は建設関係の会社の経営者 二男一女の良き妻であり母である

「若い編集者に原稿こたわる時はね 息子とか婿さんと同じくらいの歳でしょ 会社に戻ってしかられるかと思うと 可哀相でお詫びに御馳走して帰ってもらうの」

というやさしさで 受賞作「やまあいの煙」ははじめ 社会の底辺に生きる人々をテーマにした小説を書き続けてきた

(「芥川賞 重兼芳子氏」『週刊文春』1979.8.2)

また、「夫と子に埋没して得た小説作法 重兼さん」の小見出しつきの記事の中で重兼は以下のように、主婦像に込めている。

わたし、学歴コンプレックスがあったのね(旧制の高等女学校を出てすぐ結婚した)。それで、本を読んだり、講演を聞いたり、随分としたのね。でも、首から上で一生懸命したことは、役に立たなかったみたいなのね。それよりも、こんな成績でこの子、どんな学校に入れるかしらとか、娘はハナが低いからいいもらい手があるかしらとか、不安でオロオロしてたでしょう。そういう愚かな母親だったことのほうが、役に立ってるようなのね。

つまりね、文体は思想だと思ふのね。文章を、その人間と切り離して考えても仕方ないって。わたしにとっては、本を読むよりも、主人や子供たちのために家事を一生懸命にすることのほうが、文章修業になってるみたいなのね

(「酔いの明星 田中小実昌氏(直木賞)とお台所の星 重兼芳子さん(芥川賞)の“受賞のヒミツ”」『週刊朝日』1979.8.3)

さらに、「作家主婦”重兼芳子さんの女の道のり」は、「朝日カルチャーセンター『小説の作法と鑑賞講座』受講の主婦、重兼芳子さん(52才)が芥川賞を受賞して二カ月たった。まろやかな声との出

会いは、手塩にかけて漬け上げた、味わい深い漬け物の歯ごたえのような新鮮さがあった。女どうしのハートの握手を得た思いもある(後略)」のリード文から始まり、インタビューを受ける重兼の挙動を以下のように伝えている。

目の前の重兼さんは、汗をふきふき目を伏せて語る。手に握りしめたガーゼのハンカチが、丸められ、伸ばされ、また、手のひらの中でクチャクチャに丸くなる。ハンカチを持つ手は意外にごつく、つめはきれいに切りそろえられている。これは主婦の手だ。子ども三人を育て上げた母さんの指だ。今、重兼さんは主婦の時間なのだ。(中略)さて、重兼芳子さんは、気負った理詰めの人、だろうか。いえいえ違うのだ。(中略)先日、愛車のフロントガラスを割られてしまったことで修理代の胸算用に心を痛み、慣れない雑誌社の、ふかふかのソファに、居心地悪げに浅くかけて、緊張して汗をふく、平凡な、モダンな、優しい奥さまなのだ。そして、お孫さんには何をお土産に、と、そわそわするおばあちゃんの素顔も見えたような。

(「作家主婦 重兼芳子さんの女の道のり」『主婦の友』1979. 10)

これらの反応に対し、重兼は後に、以下のように回想している。

そこ [カルチャーセンター] に通う主婦たちを揶揄する風潮があって、主婦難民などからかわれる。ドラマもそのからかいの中で主婦をとらえカルチャーセンターをとらえる。自分を耕そうと志す主婦たちを、単なる風俗現象としてだけ見るのは少々片手落ちの感じがなくもない。

(重兼芳子「せめて水割りを飲むときくらい」『婦人公論』1980. 6)

カルチャーセンターで学んだ私にも取材やインタビューが相次いだ。発言が正しい記事になることは少なく、取材記者の牢固とした常識論は記事に抜きがたく反映されていた。「カルチャーセンターは主婦難民の吹きだまり」と、大見出しのついた週刊誌の目次が電車の宙吊り広告となり、テレビドラマでは

頭の弱い主婦が、「あたしもカルチャーセンターに通ってみようかしら」という台詞を吐く。私の経歴には「カルチャーセンター出身の主婦作家」と肩書がつけられる(重兼 1985: 84)。

石田佐恵子は、1960～70年代の〈女性文化人〉イメージを、女性性、活動領域、フォロワーの観点から、①女性文化人(女性性…脱女性(女性性が皆無ではいけない)、活動領域…学界・論壇、フォロワー…専門家、一般読者(男性中心))、②お茶の間文化人(女性性…女性に好かれる「親しみやすさ」、活動領域…テレビ番組、フォロワー…女性視聴者中心)に分けている(石田 2010: 148-153)。重兼については、男性を読者に含む週刊誌では「カルチャーセンター出身の主婦作家」というアマチュア性の強調によって「女性文化人」として扱わず、女性誌では「お茶の間文化人」として受け入れようとしていた状況が見取れる。

2-2. カルチャーセンターブーム

カルチャーセンターの前身は、1938年開講の東京婦人会館(のちの産経学園、小林一三が創設)にあるとされるが、1974年、朝日カルチャーセンターが、「生涯教育」をスローガンに、それまでの花嫁教室とは異なり、大学講師等を交えた高度な講座を提供する教育機関として発展させたことで社会的注目を浴びた(山本 2001: ii 他)。新宿の高層ビルであった朝日カルチャーセンターの登場のインパクトについて、重兼は以下のように振り返る。

のちに副都心と称される東京・淀橋浄水場跡地の近くに私は住んでいた。草に埋もれた廃虚のような土地がたちまち整理され、三角形の高層ビルが空を圧するように建った。朝に夕に私はビルのでっぺんを仰ぎながら、あの壁の色をなににたとえようかと考えた。70年安保騒動のころ、学生だった私の子どもたちを打ちすえた機動隊の盾、ジュラルミン色の盾と同じ色がビルの壁面となってそそり立っていた。(中略)カルチャーセンターのチラシを見たとき、私の胸は躍った。無資格、無試験、老若男女の区別な

し。私はサンダルをつっかけ家から10分ほどの高層ビルに走りこみ、48階まで一気にのぼった。若いころから耽読していた小説をきちんと整理してみたい。できれば創作にも手をつけたい。漠然とした欲求ではあったが、小説講座を受講してみることにした。試験なしで学ぶことができるだけでも、金と時間が惜しいとは思わなかった（重兼1985: 85-86）。

小平麻衣子は、カルチャーセンターの「カルチャー」のニュアンスは、エリート的・伝統的な「教養」よりも大衆的・今日的であり、戦中にも使われていた「文化」のネガティブで堅いイメージも払拭したものであるとしている（小平2016: 175）。カルチャーセンターは、その「軽い」イメージによって、朝日カルチャーセンターが登場した1970年代半ばから「主婦の暇つぶしの場」として批判されていた（☆話題追跡 大朝日が主婦抱き込み作戦に踏み切った背景を読む『週刊ポスト』1974. 2. 1, 「求道集団 太極拳や聖書講座もあります “文化のデパート” 今、花盛り」『週刊新潮』1978. 10. 5）。

重兼の受賞は、そのイメージを具現化することとなった。「家庭からフラフラとさまよい出たものの行方定まらぬ“主婦難民”たちを、ともかく生徒として“救済”しているところにこそ、この学校の存在価値がある——なんて見方も出て来ているのです」（「芥川賞で注目された『朝日カルチャーセンター』の『主婦難民』救済」『週刊新潮』1979. 8. 2）、「育児を終えた女房族のテイのいい暇つぶし機関、いや失礼！ 知的教養心を満足させる場であるカルチャーセンター（中略）第二の重兼房子氏にということか、なかでも人気が集中しているのが文学と創作コース（中略）こんな主婦がぞくぞく誕生—なにやら恐ろしい限りではあります」（「女房族のカルチャーブームますます隆盛の一途の証明」『週刊現代』1979. 10. 4）、「カルチャーセンター通いの主婦」の「軽さ」に対する批判も加速した。

これらに対し、重兼は以下のように主婦のカルチャーセンター通いを擁護している。

行きつけのスナックにボトル一本キープして、カラ

オケを三曲歌い、つまみを三種類ほど食べ二時間ほどを過ごせば、それだけで七千円ほどの金は私の財布から消えてしまう。その程度の遊びなら男たちの多くは経験していることだ。ボトル一本キープするのも自由なら、一週二時間、一ヶ月七千円ほどの出費をする自由だってあるはずだ。カルチャーセンターは金がかかるという常識は、金の使い方の価値観による違いにすぎない（重兼1985: 85）。

2-3. 「軽さ」の別面としてのラブ・アフェア

1970～80年代のマス・メディアを中心に、「カルチャーセンター通いの主婦」のより直接的な「軽さ」を演出するために持ち出されていたのが、講師や男性受講者と主婦のラブ・アフェアである。例えば、「教養も身につけ、一挙両得！ カルチャースクールダンススクール密着おつき合いテクニク」の見出しに続けて以下のような記事がある。

テレビの不倫ドラマで主婦が男と知り合う場所として数多く登場するのが“カルチャースクール”“スポーツ教室”のたぐい。主人公の主婦が共稼ぎでスーパーのレジ打っていて、そこで男と女が知り合うより、設定として、これは絶対にオシャレだ。えっ？でも、あれはテレビのドラマだろうって……。いや、キョービの奥さん、テレビの世界を現実に変えちゃう術にたけていて、“カルチャースクール”“スポーツ教室”では、実際不倫の恋はマンカイなのだ。（「教養も身につけ、一挙両得！ カルチャースクールダンススクール密着おつき合いテクニク」『週刊大衆』1988. 1. 18）

また、上田里枝子「体験記 カルチャーセンターに集まる女の暗闘」（『婦人公論』1985. 10）では、「少し気むずかしそうだが、長身で、背筋とウエストが締まったいい男」である、水墨画講座の講師「U氏」と主人公の「私」をめぐるエピソードが展開されている。

「百花斉放、万紫千紅といわれるようにその流派は沢山ありますが」と彼が話し出すと、声の悪いプレイボーイはいないって本当だな、と私は思わず頷い

てしまう。上等の肌着のように素肌に生理的快感がまといついて、下半身にジワッとけだるくしみこんでくる。私って人一倍敏感に声に反応するタチなのかしら。(中略) ある日また、いつものように、N子に私の作品が酷評された。あの骨太で、目鼻立ちのはっきりした派手なメークの顔で、けなされると、私は顔面蒼白になるが、N子の批評は的を射ていて、オチコミ方もひどいのだ。ロビーの柱の陰でぼんやりしていると、Uの声がした。(中略) そのとき、風が動いたような気がした。一瞬のことだった。「何をいわれても君はうまくなれるヨ」言葉といっしょにUの煙草の匂いと整髪料の香が迫って来て、気づいたときは彼の唇と舌の生ぬるい体温やぬめりが唇の感覚に残った。こんなこと、白昼のロビーで、起こる光景なのだろうか。

(上田里枝子「体験記 カルチャーセンターに集まる女の暗闘」『婦人公論』1985. 10)

ラブ・アフェアというまなざしは、重兼と、朝日カルチャーセンターで「小説の作法と鑑賞」を担当した駒田信二にも注がれ、重兼と駒田の仲を仄めかす暴露本まで登場した。木下(1989)は、実際に講座に参加した受講生の手記、という形を採っているが、「中国文学を専攻してきた学者である講師小股」と「亜句他側賞」候補の「滋兼」の親密さや、主人公に対する嫉妬ゆえの「人権無視、人権侵害」を告白している⁵。

駒田は、1975年秋に、小説講座講師を引き受けた経緯について、それまでに遭遇した「作品自体はよくはないのだが、内に鉦脈をかかえていて、なにか光っている」(駒田1981: 16) 人に対し、「じかに接するならば、手を貸すことができるのではなかろうか」(駒田1981: 24) と考えたためと述べる。駒田は、重兼の芥川賞受賞後の様子を以下のように述べている。

重兼さんが芥川賞を受賞したことによって、私の教室はジャーナリズムの脚光を浴びだした。多くはひやかしの脚光である。私の教室だけではなく、朝日カルチャーセンター全体を主婦難民の救済所であり、

ホストクラブのようなものだと書いた週刊誌もあった。ついでに主婦難民のためのトルコ風呂もやったらどうか、というのである(駒田1981: 26)。

3. 戦後女性芥川賞作家における重兼芳子の位置

3-1. 重兼前後の女性芥川賞作家

本章では、戦後女性芥川賞作家における重兼の位置を確認しておく。

表1は、1949～1989年の女性芥川賞作家の氏名・受賞作品・出生年・最終学歴を整理したものである。重兼を含む、戦後女性芥川賞作家の学歴に着目する時、1970年代以前の受賞者、昭和一ケタ世代の受賞者の学歴には、4年制大学卒、短大卒、専門学校卒、高女卒、とバラつきがあった⁶ことがわかる。

重兼の前後に受賞した女性芥川賞作家としてまず着目したいのが、第68回芥川賞受賞の郷静子、山本道子である。この回において、史上初の女性ダブル受賞が達成されている。

郷は、横浜の文学少女として育ったが、時代が太平洋戦争へと突入すると、13歳で勤労働員、結核発病、女学校卒業後には、群馬県赤城山麓の住職夫妻にあずけられて行儀、家事見習のかたわら、健康回復に努めた。1955年、26歳のとき左肺を切除したが、その後健康を回復する。受賞した『れくいえむ』は、1944、1945年の川崎・横浜方面の激しい爆撃から敗戦に至る悲痛が17歳の軍国少女の体験に基づいて描かれた反戦小説とされている。山本は、受賞前に5冊の詩集を出していた詩人であり、夫の海外勤務に伴いオーストラリアに居住した経験も持っていたため、そこで見聞きした戦争花嫁をテーマとして芥川賞を受賞している。

郷、山本の受賞については、郷の本名が山口三千子であったため、「二人のミチコ」として、話題となった。

第68回芥川賞は、二人の主婦作家の頭上に輝いた。これからの二人の作家生命は、主婦業と作家との両立を暖かい目で見守ってくれるご主人の協力いかなかったが、早くもご主人との名コンビぶりをご披露した。とはいえ、慣れない報道陣との対応が夜遅くまで続

いて、さすがに二人とも疲れきった表情。それは、まぎれもない主婦の姿だった。

(「芥川賞受賞の夜11時, 山本道子さん, 郷静子さんの家庭戦争の投影を書いたふたりの主婦作家の共通点」『週刊ポスト』1973.2.2)

「紫式部の再現！」といわれたのが第68回芥川賞の受賞者、まったくのダークホース, しかも初めての候補で, みごと金的を射止めた(後略)

(「芥川賞の受賞者に二人の“主婦作家”」『サンデー毎日』1973.2.4)

当時, 郷, 山本は, 共に子供を持つ主婦であったため, 重兼受賞以前に芥川賞受賞の主婦作家像は既に存在していたと言える。しかし, 両者ともに, 自身の経験に基づいた, 戦争を題材とした作品によって受賞したことが評価され, 主婦の手すさびのよう

に称されることはなかった。

郷さんの作品『れくいえむ』は, 勤労働員された一女学生の眼を通してみた戦争の実態である。「再軍備が当たりまえのようになった世の中に対して, 私たちの世代が何かいわなければいけないと思いました。あの作品に書かれている状況は私の体験です」(郷静子さん)

山本さんの作品『ベティさんの庭』は, オーストラリア兵と戦後の占領時代に日本で知り合い, 国際結婚してオーストラリアに渡り, そこでエリザベスという洗礼名を貰った日本人妻の暮らしぶりを描いている。「主人の仕事でオーストラリアに3年間いたときに会った日本人妻のかたたちを見て, この作品を書こうと思いました。日本脱出の風潮のなかで日本に帰りたい, と恋こがれている人たちがたくさ

表1 女性芥川賞作家の氏名・受賞作品・出生年・最終学歴(1949~1989)

受賞回(年)	氏名	受賞作品	出生年	最終学歴
第21回(1949年上半期)	由紀しげ子	『本の話』	1900	神戸女学院
第49回(1963年上半期)	河野多恵子	『蟹』	1926	大阪府立女子専門学校
第50回(1963年下半期)	田辺聖子	『センチメンタル・ジャーニー 感傷旅行』	1928	樟蔭女子専門学校
第53回(1965年上半期)	津村節子	『玩具』	1928	学習院短期大学
第59回(1968年上半期)	大庭みな子	『三匹の蟹』	1930	津田塾大学
第63回(1970年上半期)	吉田知子	『無明長夜』	1934	名古屋市立女子短期大学
第68回(1972年下半期)	郷静子	『れくいえむ』	1929	鶴見高等中学校
第68回(1972年下半期)	山本道子	『ベティさんの庭』	1936	跡見学園短期大学
第73回(1975年上半期)	林京子	『祭りの場』	1930	長崎医科大学附属厚生女学部
第81回(1979年上半期)	重兼芳子	『やまあいの煙』	1927	田川高等女学校
第82回(1979年下半期)	森禮子	『モッキングバードのいる町』	1928	福岡高等女学校
第85回(1981年上半期)	吉行理恵	『小さな貴婦人』	1939	早稲田大学
第88回(1982年下半期)	加藤幸子	『夢の壁』	1936	北海道大学
第90回(1983年下半期)	高樹のぶ子	『光抱く友よ』	1946	東京女子大学短期大学部
第92回(1984年下半期)	木崎さと子	『青桐』	1939	東京女子大学短期大学部
第94回(1985年下半期)	米谷ふみこ	『過越しの祭』	1930	大阪女子大学
第97回(1987年上半期)	村田喜代子	『鍋の中』	1945	八幡市立花尾中学校
第100回(1988年下半期)	李良枝	『由熙』	1955	ソウル大学
第102回(1989年下半期)	瀧澤美恵子	『ネコババのいる町で』	1939	東京外国語大学

出典) 溝川(1990)を参照し筆者作成。

んいるのではないか、それに私の望郷の念をだぶらせて書いてみました」(山本道子さん)

(「芥川賞受賞の夜 11 時、山本道子さん、郷静子さんの家庭戦争の投影を書いたふたりの主婦作家の共通点」『週刊ポスト』1973. 2. 2)

郷については、重兼より 2 歳年下で、同じく高女卒であるが、自身の経験に基づいて「軍国少女」の姿を描き出したことに対する高い評価が報じられた。

作品〔受賞作品『れくいえむ』〕中の節子は、学徒にも日の丸の鉢巻をよこせと抗議したり、学徒隊解散式で「どうして無条件降伏するのですか」と社長につめよったり、かなりの“軍国少女”なのだが、その心情は、当時の郷さんの気持そのままなのだという。(「史上初！女性二人の芥川賞作家の履歴 かたやかかつての詩壇の妖精 かたや軍国少女が人生の半ばで突然の受賞」『週刊文春』1973. 2. 5)

重兼の一つ前の女性芥川賞作家である第 73 回受賞の林京子の場合、長崎に生まれたが出生後すぐに上海に渡り、高等女学校の 2 年生まで居留する。1945 年 8 月 9 日、長崎高等女学校 3 年の 15 歳のときに長崎市に原子爆弾が投下され、大橋にある三菱兵器工場動員中に被爆した。

林の受賞作品もまた、自身の経験を反映させたものであり、選考の過程で、文学作品と呼べるか、という議論も起こったが、テーマの重要性が認められたとされる。

選考過程で問題になったのは、これは文芸作品というより、ルポ、記録なのではないかということであった。関係者によると長い議論の末、年輩の委員らの「文芸作品として立派」という強い推薦で決定したとのことである。被爆者の青春を描いた「祭りの場」は、年ごとに風化し続けている原爆体験をわれわれの前に鋭く突き出している。

(「長崎原爆の被爆者林京子氏に芥川賞」『週刊現代』1975. 7. 31)

重兼受賞の翌回である第 82 回受賞の森禮子は、福岡市に生まれ、早くに父と死別、生来の腺病質で、

小学校も長期欠席をしたり、高等女学校も体育不良で不合格になっている。戦中は飛行機工場へ動員、戦後は大学の図書館につとめ、洋裁学校に通い、そのうち隣家に転居して来た小島直記が創刊した第 3 期『九州文学』に参加した。ここに作品を発表する傍ら、各放送局の放送ドラマを書くなどし、東京では同郷の火野葦平の激励を受け、『文芸首都』同人にもなる。また、椎名麟三の主催するプロテスト文学集団にも加わった。

森も、重兼と同様、主婦作家としての側面が取り上げられた。

砂ネズミのガビ君と二人(?)暮らしの森さんは、ほんとうにあたたかな人柄の女性である。料理と洋裁が大好きで、得意のクリームコロッケを時間をかけて作る暇もほしいし、洋服をぬう時間もほしい。ひがな一日本を読んだり、それになによりも、表面はボヤッとしながら、頭の中で、小説やエッセイの主題や構成を考える時間がほしいという。

(「総決算！'80 年を飾ったしなやかな女たち 第 82 回芥川賞受賞—森禮子さん ゆっくりクリームコロッケを作る時間がほしい」『主婦の友』1980. 12)

一方で森も、山本と同様、海外滞在時に遭遇した戦争花嫁を題材とした作品によって受賞しており、作品の内容を踏まえた評価がされている。

「芥川賞は私のような地味な人間には似合わない賞だと思います でも候補になった以上 今まで支えてくれた人たちのために 是非とりたかった」と語る森さんの受賞作「モッキングバードのいる町」はアメリカ中西部の小都市に住む日系戦争花嫁たちの荒涼たる現在を インディアン青年の民族喪失の姿と重ね合わせ 重い衝撃を感じさせる作品 森さんの次姉も国際結婚でオクラホマに住んでいる(中略) 混血の息子を純然たるアメリカのエリートに育てあげようと折檻するあまり撲殺してしまうショッキングなエピソードも実際にあった事件という

(「第 82 回芥川賞受賞者・森禮子さん 文学に賭けた 30 年」『週刊文春』1980. 1. 31)

以上のように、重兼の登場以前にも「主婦作家」

は存在し、また、重兼の前後に高女世代の受賞者も存在していた。しかし、重兼の受賞作「やまあいの煙」は、純文学的な要素が強かったためとも考えられるが、重兼の年齢や生い立ちに対する社会的関心は高まらず、「カルチャーセンターに通い、駒田信二の薫陶を受け、首尾よく芥川賞を受賞した主婦作家」のイメージが先行したことになる。

3-2. 高女世代としての重兼芳子

第2章および3-1において、重兼に対して受賞前後に向けられた社会的まなざしの特徴を検討してきたが、重兼自身は、キャリア形成について以下のように捉えている。

私は試験と名のつくものに合格した経験は一度もない。女学校は戦争中で勉強はろくにできず、社会が落ち着いてから大学の通信教育を受けようとした。しかしそれには高校卒の資格が要る。それでは高校からやり直そうと、定時制高校を受験してみたが、根っから試験ばかの私はどこにも入れない。東京都の社会人対象の二年制の学校を受験したが、1.25倍という倍率にもかかわらず、三度受験して三度とも失敗した(重兼1985: 86)。

朝日カルチャーセンターの場合は、おおむね現在の日本の水準では、かなり質の良い講師を揃えている。大学の講義と同じ程度の質の高い講義をする。大学が市民に向かって開かれていない限り、学問への欲求を充たすには今のところカルチャーセンターしかない。(中略)最も特徴のあることは、無試験で誰でも入れる代わりに、ここで何年勉強しようがどんなに熱心に出席しようが、無資格であるということだ。履歴書に大学出身という経歴を書くことはできない。学閥を利用しようにも学閥になるべき力がない。要するにここで学んだ見返りは、本人にとっての充実感以外になにもないということだ。学ぶということは、もともとそれが自然なのではなからうか。(中略)カルチャーセンターに通う中年族をからかい、眉をしかめ、優越感を抱いて攻撃するのは主にエリートの人たちだ。学業半ばで戦争に取られ、その後、家

族を養うために営々と働き、ようやく落ち着いて半ばでやめた学業を取り戻している。それを笑う権利がどこにあるか。少しは恥を知るがよいと私は腹の中で憤る(重兼1984: 120-121)。

このように、最後の高女世代、そしてそれゆえに学歴の獲得に苦心する重兼像は、マス・メディアにおいてはほとんど触れられることがなく、既述のように、カルチャーセンターに通う「有閑マダム」「社長夫人」としてキャラクターづけられていった。

4. 戦後教育史研究として女性の教養を捉える視点

都市型の教育文化産業であり、従来の「教養」「文化」講座とも異なるイメージを提供したカルチャーセンターは、その当時から、「生涯教育」というスローガンと共に社会教育学者の懸念を募らせ、カルチャーセンター受講者の実態調査が繰り返されてきた(拙稿2009, 元森2010)。しかし、社会教育行政における趣味・教養的な講座の位置づけについての学術的な考察とその蓄積が不十分な中でカルチャーセンターと社会教育行政事業の比較考察が行われたことで、両者の受講者の違い(階層など)が明るみになる結果に終始してきた(拙稿2009)。

重兼が社会的まなざしに抗して主張していた、無試験で学びの機会を保障し、また充実感を得る場としてのカルチャーセンターという視点は、商業的アピールにつながるものと捉えられるためか、戦後教育史研究においても十分な議論がなされてこなかったように思われる。しかし、重兼の例に見られるように、戦後においてもなお、シリアスレジャー(Stebbins)としての女性の教養醸成がしばしば公教育によっては保障されづらく、社会的にも、軽薄⁷なもしくは(「花嫁修業」⁸のように)伝統的な消費文化として認知されやすかった状況を踏まえれば、そのような女性の教養醸成を支えた教育文化産業の実践も、戦後教育史が記述する対象として再考される余地を残している。

本稿は、資料上の制約から、重兼芳子について、芥川賞受賞前後の動向を中心に検討し、ホスピス運動家としての社会的形成について考察できなかった。

また、重兼同様に、駒田信二の小説講座出身の作家である野島千恵子や加地慶子に対する考察も必要であろう。これらについては今後の課題とし、別稿に譲ることとしたい。

付 記

本稿は、拙稿（2013）「女性芥川賞作家としての重兼芳子—カルチャーセンター・主婦・高女世代—」（『女性文化人』の社会的形成に関する歴史社会学的研究』（稲垣恭子研究代表、平成22年度～平成24年度科学研究費補助金（基礎研究B）研究成果報告書）所収）に大幅な加筆・修正を施したものである。本稿の執筆にあたり、科学研究費補助金（基盤研究C、2019～2021年度）「近代初期日本における美術・文化愛好者の再生産過程—学校外での教習活動に着目して—」（早川陽研究代表、19K00139）の助成を受けた。

引用文中には、現在では不適切とされる表現が見られるが、歴史的背景を適切に伝えるため、あえてそのままとした。

註

- 1 本稿において、芥川賞受賞作家（以下、「芥川賞作家」と略記）の来歴については特に断りのない限り、溝川（1990）を参照している。
- 2 加地慶子によれば、駒田信二は、1914年大阪府生まれ。幼少時は、父親の転勤で各地を移り暮らす。小学校、中学校は三重県津市に落ち着くこととなる。厳格な父親から逃れ、2年間を千葉市で過ごした後、1934年に山形高等学校文科甲類に入学、東京帝国大学文学部支那文学科へ進み、中谷孝雄に師事した。大学在学時に日本浪漫派に入会、また、同人雑誌『新樹』を創刊する。東大卒業後、松江高等学校（のちの島根大学文理学部）教授に迎えられ、翌年中国大陸へ召集される。中国国民党に、中国共産党工作員と間違われ、死刑囚として地下牢に閉じ込められるが、1946年8月、病気のために釈放されて帰還する。1948年に雑誌『人間』に応募した小説『脱出』で、「人間新人小説賞」を受賞する。1955年に東京へ転居し、諸大学での講義を続ける傍ら、1958年から23年間、文芸雑誌『文学界』の同人雑誌評を林富士馬、久保田正文、小松伸六の三氏と担当した。1979年、第27回菊池寛賞を、他の三氏とともに受賞する。また、1976年から19年間、「朝日カルチャー

センター・東京」、1981年からは「同・横浜」で、1994年12月まで講師を務め、同月逝去した（加地1998：16-18）。

- 3 第81回芥川賞選考過程において、村上春樹『風の歌を聴け』に大差をつけたとされている（『芥川賞・直木賞の選考経過』『読売新聞』1979.7.20夕刊）。
- 4 雑誌記事の選定に際しては、大宅壮一文庫所蔵の週刊誌を参照した。以下、雑誌記事の引用に際しては、引用末尾に文献情報を記載する。なお、記事を引用する場合、引用箇所は、同趣旨記事の一部である。
- 5 重兼、駒田による反論記事として、「朝日カルチャーセンターが頭をかかえる内幕小説女作家養成所の『女の戦い』」（『サンデー毎日』1989.3.26）がある。
- 6 吉行理恵以降の受賞者は、4年制大学卒の割合が増えているが、女性の4年制大学進学率が15%を超え、マス段階に入ったのは1990年である（広井2005：43）。
- 7 こうした傾向を論じたものとして女子学生亡国論があるが、その展開については、稲垣（2007）、小山（2009）などに詳しい。
- 8 詳細は、拙稿（2019）を参照されたい。

【引用・参考文献】

- 広井多鶴子（2005）「女性の大学進学率の上昇と女子大学—人間社会学部の設置をめぐる—」『実践女子大学人間社会学部紀要』第1集、pp. 41-55.
- 稲垣恭子（2007）『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社。
- 石田佐恵子（2010）「〈女性文化人〉の構築とその力学—〈女性文化人〉は消滅するか？」南後由和・加島卓編『文化人とは何か？』東京書籍、pp. 148-169.
- 加地慶子（1998）『書きつけて死ねばいいんです—駒田信二の遺した言葉』新潮社。
- 木下径子（1989）『女作家養成所』沖積舎。
- 小平麻衣子（2016）『夢みる教養—文系女性のための知的生き方史』河出書房新社。
- 駒田信二（1981）『私の小説教室』毎日新聞社。
- 小山静子（2009）『戦後教育のジェンダー秩序』勁草書房。
- 溝川徳二編集代表（1990）『芥川賞・直木賞—受賞者総覧—』教育社。
- 元森絵里子（2010）「カルチャーセンターの『深さ』と『浅さ』」遠藤知巳編『フラット・カルチャー—現代

- 日本の社会学』せりか書房, pp. 179-187.
- 南後由和 (2010) 「〈文化人〉の系譜 界とマスメディアの交わり」南後由和・加島卓編『文化人とは何か?』東京書籍, pp. 16-59.
- 野島千恵子 (1981) 『駒田信二の小説教室』文芸春秋。
- 重兼芳子 (1984) 『女の人生曇りのち晴れ』主婦と生活社。
—— (1985) 「カルチャーセンター」朝日ジャーナル編『女の戦後史 III 昭和 40・50 年代』朝日新聞社, pp. 84-91.
- Stebbins, R. A. (2015) *Serious Leisure: A Perspective for Our Time*. Transaction Publishers.
- 歌川光一 (2009) 「カルチャーセンター研究史—生涯学習・社会教育研究における趣味講座の位置づけをめぐる試論的考察—」『生涯学習・社会教育学研究』第 33 号, pp. 67-77.
- (2019) 『女子のたしなみと日本近代—音楽文化にみる「趣味」の受容』勁草書房。
- 山本思外里 (2001) 『大人たちの学校 生涯学習を愉しむ』中央公論新社。

(うたがわ こういち 初等教育学科)